

藤原定頼の詠歌に見られる一特色

——見立ての意外性と逆転発想技巧——

古 瀬 雅 義

はじめに

世に「三舟の才」とうたわれた藤原公任の息子に、定頼という歌人がいる。中古三十六歌仙の一人に数えられ、また百人一首にも

朝ぼらけ宇治の川霧絶え絶えに あらはれわたる瀬々の綱代木の歌で採られている。平安中期から後期にかけて活躍した歌人であるが、エピソードの多い人物でもあり、中でも特に有名なものに、歌合を前にした小式部内侍に対し、「丹後の国に下った母和泉式部のもとへ、代作を頼む使いをやりましたか」と戯れかけた時に、

大江山いく野の道の遠ければ まだふみもみず天の橋立

と逆襲され、予想外の展開に返歌もせず、あたふたと逃げ帰ったという、大江山事件がある。『栄花物語』(巻三十七「衣の珠」)によれば、公任はわが子定頼を容姿端麗、頭脳明晰の貴公子と評し、他人はきつと定頼のような子を自分の子として欲しがらうとべたほめしたという。公任の親、バカぶりも知られるわけだが、才色兼備とは言いながら、少し軽薄な面があり、そういった親しみやすい貴公子であったがゆえにエピソードになりやすかったものと思われる。

その定頼の若い頃の秀歌のひとつに

水もなく見えこそ渡れ大井川 岸の紅葉は雨とふれども

という歌がある。本稿ではこの歌を手掛かりにして、先行歌享受の仕方を見直しと比較することによって定頼の歌のオリジナリティな技巧を考え、定頼の歌風を考える上でステップとしたい。

一 『西行上人談抄』のエピソード

「水もなく」の歌は、二類本『定頼集』では自撰部分とされる前半部(三六)番歌に「おなじ頃おほむにおはしたるに紅葉といふ題を」の詞書で収められている。この歌は定頼の代表歌のひとつと評され、「大井川にてよみはべりける」と言う詞書で『後拾遺和歌集』にも入集されている。また定頼を中古三十六歌仙の一人として選定した平安後期の学者歌人、藤原範兼も『後六々撰』の中でこの歌を定頼の代表歌三首のうちの一つとしてとりあげている。さらにこの歌は、披露された時のエピソードが『西行上人談抄』に以下のように伝えられている。

・上句平懐なれどもよき歌

水もなく見え渡る哉大堰川 きしの紅葉は雨とふれども

此哥は中納言定頼歌なり。一條院御時大み川の行幸に歌よませられる時、四條大納言、わが歌はいかでありなむ、中納言よくよめかしと思はれけるが、すでに此歌を「水もなく見えわたる哉大井川」とよみあげたりけるに「はや、不覚してけり」と顔の色を違へて思はれたるに、「きし（みねい）の紅葉は雨とふれども」とよみあげたりけるに、「秀歌仕て候けり」といひて、顔の色出来てぞ思はれける。

上句平懐なれどもかやうによき歌もあり。但、歌によるべし。

（群書類従本）

『西行上人談抄』は西行の和歌弟子であつた蓮阿が、和歌に関する師の談を晩年に著したものである。『西行上人談抄』では「一條院の御時」とあるが、これはおそらく「小一條院」が正しく、次に引く『御堂関白記』寛仁二年九月十六日条に記述される小一條院嵯峨野大井川遊覧の折りの「紅葉浮水」という歌題での詠歌と考証できらると思ふ。

・ 十六日乙亥、此日院野望給嵯峨野及大堰河、乗舟、上下有管絃事、為政朝臣（慶滋）献和哥題、紅葉浮水、即令為政献序題從舟下至桂家給、此晚。（景と、皆乗馬）於桂家講和哥、經通朝臣奉仕講師、御前物以濱棒如泪器台四本、用銀器有打敷、上達部縣懸、殿上人破子等、候人々撰政・中宮大夫（道綱）・按察大納言・四條大納言・左大将（教通）・左衛門督・中宮權大夫・右衛門督・二位宰相（藤原兼隆）・左大弁・修理大夫（藤原通任）・右大弁（藤原朝経）・侍從宰相等、事了献馬二疋、還院給々余笙・笛等、給撰政銀各退出、此夜与女方渡候中宮、是依犯土也。

（『御堂関白記』 大日本古記録、東大史料編纂所。寛仁二年

九月十六日条。頭注に「小一條院嵯峨野大井川遊覧」道長ノ桂別業ニ於テ舟中作ル所ノ和歌ヲ講ゼシメ給フ」とある）

この御幸は三女威子の立后を一ヶ月後に控え、わが世の望月を謳歌していた道長が、小一條院をともなつての遊宴であつたため、撰政頼通以下多くの貴族が同行し、舟遊びの最中に歌題が出され、その夜、宴たけなわになつて歌の披露が始まつたことがわかる。公任にとつて大井川遊覧と言えは必ず思い出されるのは、寛和二年（九八六）十月の円融院大井川御幸の時に博した「三舟の才」の誉れであつた。あれから三十二年の歳月が過ぎ、今や大歌人という押しも押されぬ地位を築いた公任は、道長を彩る文化ブレインとして活躍してきたが、それというのも若い頃に得た「三舟の才」の誉れも大きな要因になつたと思われる。今、息子の定頼は二十四歳。一昨年前に道長の上表文を書き、その書の美しさを絶賛され、笛の名手という評もとり、文化面での評価が高まつてきている。また官吏としては、昨年より蔵人頭を勤めており、事務官僚として、次期参議のポストを狙える位置にいた。公任としては、今日は諸卿の前で是非とも評判となる秀歌を詠み、文人貴族としての評を固めて欲しいと切に願つていたのであろう。ところが上の句を聞いた公任は「はや不覚してけり」と顔色を変え、頭を抱えてしまった。しかし下の句が詠みあげられるや否や、一転して「秀歌を詠んだ」と安堵し、得意満面になつた、というエピソードである。

公任の反応が上の句だけを聞いたときと、下の句まで聞いたときとは対照的である点に興味を惹かれる。これを手掛かりにしてこの歌における見立てと発想について、先行歌の享受とからめて考え

てみたいと思う。

二 先行歌の享受について

定頼は下の句で、散る紅葉を「雨のように降る」ととらえているが、このとらえ方は『奥義抄』で清輔が「古歌を盗んだ」としてあげているように、『古今和歌集』に入集された凡河内躬恒の歌にすでに見られる表現である。久曾神昇氏は古今集関戸本についての御考察において、定頼が寛仁四年以前に『古今和歌集』上巻を書写したであろうと推察されている。また、『定頼集』の中でも『古今和歌集』の歌と下の句が全く同じといった定頼の歌が数例みられることから、定頼は『古今和歌集』に精通していたことがうかがわれ、躬恒の歌についても当然知っていたと思われる。盗んだかどうかはともかく、先行歌であることには間違いはなさそうである。

ところが定頼の父公任も、躬恒のこの歌を先行歌として利用した歌を詠んでいるのである。公任・定頼と親子で躬恒の歌を先行歌としている点に注目し、三者の歌を比較することによって、先行歌享受方法について考えてみたいと思う。

(a) 凡河内躬恒 〔古今和歌集〕卷五秋下三〇(五)

亭子院の御屏風のゑに、河わたらむとする人もみぢのちる木のもとにむまをひかへてたてるをよませたまひければ、つかうまつりける

立ちとまり見てをわたらむもみぢはは

雨とふるとも水はまさらじ

(b) 藤原公任

〔公任集〕 三三七(七)

中将におはしける時、冬の夜さうぎょうしとて、歌あはせの様な

る事し給うけるに

もみぢはは雨とふれども空はれて

袖より外はぬれずぞ有りける

(c) 藤原定頼 〔定頼集〕二類本〔自撰本系〕三六〇

おなじころおほむにおはしたるに紅葉といふ題を

水もなくみえこそわたれ大井川

きしのもみぢは雨とふれども

(a)の凡河内躬恒の歌は、「雨が降るかのように紅葉の葉が散りしきるが、実際の雨ではないので川の水かさが増える」と言う心配はあるまい。馬を留めて紅葉をじっくりと眺めてから川を渡るとしよう」といったユーモアに富むものである。この歌のおもしろい点は、紅葉の散る様を雨が降る様に見立てたところにあるのだが、実際に雨が降ったわけではないので、従って「水はまさらじ」という発想がオチとなっている。公任はこの躬恒の歌を『和歌九品』において「中品の上」と位置付け、「心詞とゞこほらずしておもしろき也」と評価している。そして公任自らこれを先行歌として詠んだ歌が、(b)の歌「もみぢはは雨とふれども空はれて袖より外はぬれずぞ有りける」である。この歌は躬恒の歌の第三句と四句「もみぢはは雨とふるとも」を「ふれども」に変えて初句・二句にもってきて、「紅葉が雨のように降るけれども本当に雨が降っているわけではないので、実際にぬれたりはいしない。それにもかかわらず私の袖が濡れるのは、我が涙のせいである。」という発想であり、雨の降ってくるスタート地点である空を見て、実際は晴れていることを確認した上で「涙雨で濡れる私の袖以外は何もぬれたりはいしないのだ」と詠んだわけである。両者の歌を比較すると、躬恒が「水はまさらじ」とも

つていった発想に対し、公任の歌は「空晴れて」「袖より外は濡れず」とアレンジしたものになっていることが指摘できる。

次に定頼の歌についてみてみよう。公任は散る紅葉を雨が降る様に見立てたフレーズを上句の初句と第二句にもってきいているのに対し、定頼は下の句の第四、第五句にもってきいている。その結果「紅葉の葉が雨の降るように散っている」という既定条件が上の句を聞いただけでは聞き手に全く知らされていないということになる。大井川は堰を作って水量を調節しなければならぬほど水の豊かな川である。それをともあろうに「水が無いように見える」と見立てたのであるから、普段の情景とは全く逆の見立てということになる。そのあまりの意外性に公任は「不覚してけり」と青ざめたのである。

ところが下の句により「岸の紅葉の葉が雨のように散っている」という既定条件が加えられるやいなや聞き手には「なるほど、散った紅葉の葉が川面いっぱいになるで敷きつめられたように浮いている様を、水量豊富な大井川の水が無くなってしまったかのように見える」と見立てたのだ」ということがたちどころに理解できるわけである。これが私の意味するところの「見立ての意外性」である。

次に着目したいのは、上の句と下の句との関係についてである。定頼の下の句の末尾に用いられている接続助詞「ども」は、既定の逆接条件を示すが、定頼は「ども」を用いることにより、「雨が降るかのように紅葉の葉が頻りに散ってはいるが、実際の雨ではないので水かさが増えはしない」という既定条件を引き出し、更に「水かさが増えないばかりか散った紅葉が水面いっぱいに敷きつめられ

たかのように浮いていて水が全く無いように見える」という逆転発想を意識的に披露しているのだ、と私は考えている。定頼がここで「ども」を用いたのは、単に父公任の「雨と降れども」というフレーズをそのまま借用したわけではなく、躬恒の歌に見られる「水はまさらじ」というオチを必要としたからであろうと考えられる。仮に定頼が上下の句を順接で構成してしまったならば、「雨のように紅葉が頻りに散るので、散った葉が水面を覆い尽くしてしまい、水が無くなってしまったように見える」という具合になって、せっかくの意外な見立てを直接説明するだけに終始してしまい、おもしろ味が半減してしまつたに違いない。

定頼は逆接の接続助詞「ども」を用いることにより、躬恒の発想である「水はまさらじ」を採り込み、それをワンクッションとすること、直接説明するよりもひねりを加えた和歌に仕立てあげ、やや複雑ではあるが、知的で機智にとんだ理由によつて大井川を「水もなく見えこそわたれ」と見立てた意外性をタネ明かししていったのである。しかも「ども」を一番末尾にもつてきたことで効果の面でも逆転発想のインパクトが最大限に生かされているといえよう。したがつて上の句を聞いたときには「不覚してけり」と頭を抱えこんでしまつた公任が、下の句を聞いた途端に一転して「秀歌仕りて候けり」と安堵し得意満面になつたのである。まさに「とりあわせの妙」と言えると思う。

また定頼のこの意外な見立ては、雨が降り注ぐように散っていく紅葉の葉の終着点である川面に着眼しており、公任が雨の降ってくるスタート地点である空を見ているのとは、目を向けている所が違ふという点の指摘もできる。(b)の公任の歌は詞書により公任の中將

時代の歌で、永観元年（九八三）十二月より正暦三年（九九二）八月までの公任十八歳から二十七歳までの間に詠んだ歌とわかる。おそらく定頼はこの歌を知っていたのだろう。その上で同じフレーズを下の句に持ってきたのだろうか、歌全体としてはひねりの効いた全く別のオリジナルなものに仕上げていると言える。定頼は公任の先行歌があったからこそもう一步進め、雨の帰着点である水面を見てこのような意外性に富んだ見立てをすることができ、また同時に躬恒の先行歌があったからこそ、下の句まで詠みあげたところでひねりの冴えた知的な歌として理解されることになるのである。ここに和歌の伝統の重層性を看取れると思う。さらに付け加えれば、躬恒と公任の歌は観念遊戯的であるのに対し、定頼の歌は具象イメージを喚起させる力を持っていると思われる。このような歌を詠んでみせた定頼を見て、父公任は「あいつもなかなかやるわい」と、さぞ満足したであろうことは、想像するに難しいことではない。

三 藤原範兼が選んだ定頼の秀歌

定頼の歌の上の句は歌語らしいものもなく、『西行上人談抄』のいうように、用語の上では「平懐」という評価になるのが、公任の言動から推察できるように、披露されるやいなや場が盛り上がるという効果をもたらした。そういった演出効果も評価されたのであろうか、この歌のおかげで定頼は歌人としての評価が一層高まり、「意外な見立てと逆転発想の妙」が彼の歌の特徴としてとらえられるようになったようである。

定頼を中古三十六歌仙の一人に選んだ藤原範兼が『後六々撰』に採った定頼の和歌三首は、すべて『後拾遺和歌集』に入集していた

ものである。『後六々撰』は詞書がないので『後拾遺和歌集』の詞書を参照し、詠歌状況とあわせて考えてみたいと思う。

（一一四） つつしむべきとしなければ、あるくまじきよしひはべり

けれど、三月ばかりに白河にまかりけるをききて、さが
みがもとより、かくもありけるはといひおこせはべりけ
ればよめる 中納言定頼

さくら花さかりになればふるさとの

①

（三六四） 大井川にてよみはべりける

中納言定頼

みづもなくみえこそわたれおほはがは

②

（四七七） 橘則光みちのくにくだり侍けるにいひつかはしける

中納言定頼

かりそめのわかれとおもへどしらかはの

③

※歌番号は『後拾遺和歌集』のもの。

第三首目の「かりそめの」の歌は、詞書から、定頼の友人であった橘則光が陸奥守となって赴任していくときに詠み送った歌とわかる。則光の陸奥守在任は寛仁三年（一〇一九）前後より治安三年（一〇二三）までであるから、仮に寛仁三年の詠歌とすれば、定頼二十五歳の時の歌となり、「水もなく」の歌を詠んだ翌年ということになる。白川や白河の関については、先行歌や後の歌にも歌語として多く散見し、以下のような歌が著名である。

（a）藤原公任

（『公任集』 二八）

白川の同じ河辺の桜花

(b) 藤原実方

いかでかは人のかよはんかくばかり

〔実方集〕I 一五九

水ももらさぬしらかはのせき

(c) 能因法師

みやこをばかすみとともになちしかど

〔後拾遺和歌集〕卷九 羈旅 五一八

秋風ぞふくしらかはのせき

「白川」は主に色の白さに水の清らかさをかけたり、また桜の名所であったことから、(a)の歌のように花にかけて詠まれていた。一方「白河の関」は、卯花・雪・青葉・紅葉・秋風・霞等とあわせて詠まれ、また藤原実方は(b)の歌のように、陸奥国との境という重要な関所であったことから「水ももらさぬ白河の関」と詠んでいる。

しかし定頼はそれを逆手にとり、「あれほど守りの堅い白河の関ですら、とどめることのできぬ惜別の我が涙よ」と詠んでいる点に着目したい。定頼の歌は、たとえかりそめの別れであらうとも、親しい友人が遠く陸奥国へ下っていく別れの寂しさや悲しさを一層際立たせる効果を持つ逆転発想の歌と言えるのではないだろうか。

次に、第一首目の「さくら花さかりになれば」の歌について考察してみよう。この歌は女流歌人相模との交渉であることから、相模が夫の大江公資につき従って東国へ下向した寛仁四年(一〇二〇)以前か、帰京後の万寿元年(一〇二四)以降の歌かということになるが、「慎むべき年なれば」を亡き妹の喪ととれば、万寿元年頃の歌と考証することができ、定頼三十歳の頃の詠歌ということになる。したがって『後六々撰』に採られた三首とも定頼の前半生における若い頃の歌ということになる。この歌を詞書とあわせて考えてみる

と次のような解釈ができる。

今年に定頼にとって慎むべき年で、家に閉じこもっていたため、自宅にむぐら(雑草)が生い茂って門のかわりをするほどまでになつてしまった。ところが桜の名所、白川(白川には、父公任の別荘がある)が花盛りになったと聞いて、こらえきれずに花見に出かけてしまった。その結果、門のかわりをしていむぐらがその役割を果たせなくなつてしまった。そのことを下の句で「むぐらのかどもさされざりけり」と詠んでみせたのではないだろうか。むぐら(雑草)が茂っている様を、自分を閉じこめておく門とらえたおもしろい見立てと、そういう役割を果たせなくなつてしまったむぐら、という発想がこの歌のおもしろいポイントであり、範兼はそのところを評価し、定頼の代表歌として選んだのではないだろうか。

この歌は逆接の接統助詞こそ用いられてはいないけれども、見立ての意外性と逆転発想の妙からなる歌であると解することができる。

『後六々撰』には、計百四十六首の歌が選ばれているが、そのうち「ど・ども・とも」を用いている歌は十五首で、その割合は一〇・三％である。公任撰の『前五番歌合』は三十首中三首で一〇・〇％、『三十六人撰』は百五十首中十三首で八・七％を示す。また樋口芳麻呂氏が公任撰と目された『後十五番歌合』についても三十首中三首で一〇・〇％を示すことから、範兼は秀歌としてとくに逆接構造の歌を多く選んだわけではないと考えてよい。したがって範兼は中古三十六歌仙の一人として定頼を選ぶにあたり、その代表歌を三首ともこの種の歌にしたということは、定頼の歌の特色を「見立ての意外性と逆転発想の妙」にあるととらえ、しかも評価してい

たということが考えられる。

四 定頼の詠歌と逆転発想

この点に注目して、定頼の家集を調査してみたいと思う。『定頼集』は二系統が現在に伝わり一類本・二類本と呼ばれている。いずれも日常詠を中心にしたものであるが、一類本は他撰本系で藤原定家筆本を祖本としたもの、一方、二類本系は前半(三三四)番歌までが自撰本系、後半部は一類本前半部(一三六)番歌までと歌のみならず配列の一致する所が多く、森本元子氏はこの点から、もとは同一祖本かと述べられている。森本氏は詠歌年代についても詞書に見える人物の官職名や内容から詳細に検討されており、その御研究によれば、自撰部分は長和・寛仁・治安・万寿年間にわたる定頼前半生の歌を自らまとめたもの、また他撰部分は定頼死後、その遺詠を収集して成立したものであるとされ、大部分が長元・長暦・長久年間の歌であり、定頼後半生の詠歌を中心にして、さらに自撰部分には脱落した歌を少数加えたものと推定されており、さらに自撰部分後半部は定頼が後半生より晩年にかけて親しく交渉のあった一女性が定頼との贈答を書き連ねたものとなっており、出家後の歌や辞世の歌を含む晩年の歌を多く伝えていると指摘されており、

二類本『定頼集』前半部分 (自撰部分) 前半生の歌

同 後半部分 (同一祖本)

一類本『定頼集』前半部分 (他撰部分) 後半生の歌

同 後半部分 (他撰増補部分) 晩年の歌

(更に増補部分) 漏歌増補

各部における逆転発想の歌の割合を調査してみた結果、次のデー

タが得られた。

①二類本『定頼集』前半部分 (一〜三三四) 万寿三年まで

前半生の歌(長和・寛仁・治安・万寿) 二十一〜三十二歳

〔I 明 A〕		定 頼	その他	合 計
総数	二七一		六三	三三四
逆 転	三八		二	四〇
割合	一四・〇%	三・二%	一二・〇%	

②一類本『定頼集』前半部分 (一〜一三六) 長久元年まで

後半生の歌(治安・万寿・長元・長暦を中心) 四十五歳

〔I 定 a〕		定 頼	その他	合 計
総数	一〇五		三一	一三六
逆 転	二五		六	三一
割合	二三・八%	一九・四%	二二・八%	

③一類本『定頼集』後半部分 (一三七〜一七四) 晩年の歌

(一七五〜一八七) 増補の歌

晩年の歌 (長久・寛徳年間の贈答歌を中心) 五十一歳

〔I 定 b〕		定 頼	その他	合 計
総数	二二		一六	三八
逆 転	六		二	八
割合	二七・三%	一一・五%	二一・一%	

※二類本（明王院本）前半部を「Ⅱ明A」、一类本（定家筆本）前半部を「Ⅰ定a」、同本後半部を「Ⅰ定b」と略記した。

各部における逆転発想の歌の割合を比較してみると、前半生では一四・〇％であったものが後半生では二三・八％と増加し、さらに晩年では二七・三％と高い比率を示すまでに増加していることがわかる。（後半生の部分や晩年の部分で他人詠が一九・四％、一二・五％を示すのは、多くは定類との贈答においての返歌であり、したがって定類と同じような歌で応酬したため、という要因が考えられる。）

次にここで逆転発想の歌の構造について考えてみたい。『後六々撰』は採られた定類の歌三首のうち、二首に「ども」「ど」という逆接の接続助詞が用いられている点に注目し、『定類集』における「ど・ども・とも」について調査したものが次の資料である。

	定類詠		逆接の接続助詞	
	歌数	逆転	あり	なし
①Ⅱ明A	二七一	三八 (一四・〇％)	三三 (一二・二％)	五 (一・九％)
②Ⅰ定a	一〇五	二五 (二三・八％)	一七 (一六・二％)	八 (七・六％)
③Ⅰ定b	二二	六 (二七・三％)	一 (九・一％)	四 (一八・二％)
④一七四 一八七 まで	三二	七 (二二・六％)	三 (九・七％)	四 (一二・九％)

逆転発想——
逆接の接続助詞（ど・ども・とも）あり
逆接の接続助詞なし（意味の上で逆転）

この表によると、①前半生部と②後半生部とは、後半生部のほうが逆転発想による歌は九・八％増加しているが、その増加の内訳を見ると、逆接の接続助詞のあるものが約四％の伸びに対し、それを用いない、いわゆる意味上での逆転発想の歌が約六％の伸びを示して上回っているのである。この現象は晩年の部分において顕著となっていく。したがって定類は歌人として成長していくにつれ、逆接の接続助詞を用いる構造から、全体の意味の上での逆転発想の歌を詠む方向へと移っていったという足跡がうかがえるのである。

参考までに八代集において、逆接の接続助詞「ど・ども・とも」および、「ものを・ものの・ものから」の使用状況について調査してみたのが次の資料である。

注Ⅰ 「ど・ども・とも」を使用した歌数

Ⅱ 「ものを・ものの・ものから」(逆接の意味に限る)を使用した歌を加算した歌数

	総歌数		Ⅰ		Ⅱ	
			割	合	割	合
古今集	一一〇〇	一一五	一・四％	一四三	一・三％	〇％
後撰集	一四二六	一三九	九・八％	一六四	一・五％	
拾遺集	一三五一	一五四	一・四％	一七二	一・七％	
後拾遺集	一一二〇	一一三	九・三％	一四〇	一・五％	
金葉集 (三奏本)	六五〇	四八七	七・四％	五四	八・三％	

詞花集	四一五	三六	八・七%	四四一〇・六%
千載集	一二八五	一二二	九・五%	一三九一〇・八%
新古今集	一九七九	一八四	九・三%	二〇九一〇・六%

定類は「ものを」を詠嘆の意味でしか用いず、また「ものの・ものから」については用いていないため、これらについての比較は割愛し、「ど・ども・とも」について比較してみると、前半生から後半生にかけては八代集よりも上回ったデータとなることがわかる。『後拾遺和歌集』の示す九・三%は定類の一六・二%の六割以下の値であり、「ものを・もの・ものから」を加えた一一・五%と比較しても七割程度にしかならない。ところが、晩年の歌となると、定類の逆接構造の歌は九・一%に減少し、八代集のデータとはほぼ肩を並べるまでに減っているのである。

五 逆転発想の歌を詠むことの意味

さて、定類は逆転発想をどういう場合は用いていたのだろうか。この点について詠歌対象別に分類した結果次のデータが得られた。

	自然対象	人間関係	計
①Ⅱ明A	一八	二〇	三八
②Ⅰ定a	一三	一二	二五
③Ⅰ定b	〇	六	六

③の晩年の詠歌は、一女性とのやりとりからなる部分であるために人間関係の中だけとなってしまっても、①前半生から②後半

生にかけての部分を見ると、自然対象（これは題詠歌、屏風歌を含む）でも人間関係の歌のやりとりの中でも、偏ることなく用いていることが指摘できる。ところが『後拾遺和歌集』で逆接構造の歌を詠んだ歌人を調査した結果、ベスト3となった和泉式部・能因・相模について分析すると、次のようなデータが得られた。逆接の接続助詞（ど・ども・とも・ものを・もの・ものから）使用歌について部立別に調査したデータである。

	四季部		計
	人間関係 (恋・雑・旅)		
和泉式部	二	一一	一三
能因	八	一	九
相模	〇	七	七
定類	二	一	三

この表は、和泉式部と相模は人間関係の中において多く用い、反対に能因は自然を詠歌対象とした歌に多用するといった偏りが見られることを示している。逆転発想の歌を詠むということは、ある意味でトリックを使うことにもなると言える。しかし、そのためには相手の反応をあらかじめ想定し、その心の動きや思考パターンについてもよく目配りできなければ詠むことができない。相手が予想した展開とは異なる歌を詠んでみせ、贈ったりあるいは返すことで、定類の歌の世界での意外な展開におもしろみを感じさせ、そういった歌の魅力で相手に親しみを感じさせることができ、初めて人間関係をスムーズな方向にもっていくことが可能になる。そのためは何よりも相手についてよく観察し推量して、相手の出方を予想で

きるまでに至らなければ、相手の意表を突いた歌を構成することは不可能である。

つまり、逆転発想の歌を自在に詠めるといふことは、かなり高度な説みが必要とされるのであり、そういった意味において、定頼の詠歌対象にとらわれない逆転発想の歌の増加は、彼の人間観察の幅の広がりを示しているものと考えられるであらう。この点については、長曆三年（一〇三九）の生子入内事件における定頼の行動（當時定頼四十五歳、従二位・権中納言の職にあった）などをあわせて考えることができるが、枚数の関係から次の機会に譲りたい。

六 まとめ

若い頃、大井川で意外な見立てと逆転発想の妙によって、先行歌をふまえてつ、ワンクッションおいた機智のある歌を詠み、場をわかせて高い評価を得た定頼。公任も秀歌と認めたこともあって、このエピソードは有名になり、周囲はやがて定頼にこのような類の歌を詠むことを求めていったようである。特徴が周囲からも決定づけられていったのであろう、定頼は成長するにつれ、逆転発想の歌が増加していく。たとえば一類本『定頼集』に

（三九）

すだれに雨のたまのやにかゝりたるを
雨にいとぶあれのみまさるふるさとに

思もかけぬたますだれかな

（六四）

三月つごもり、郭公のなくを
ほとよぎす思もかけぬ春なげば

こしはまたではつねきよつる

（一二七）

かものまつりの日なるべし

ちはやぶる神のしるしと思哉

思もかけぬけふのあふひは

という歌が見える。三首とも「思もかけぬ」というフレーズを用いて、ある意味では露骨なぐらいに意外性を強調しようとしている。このフレーズが歌の途中で出てくるということは、これから逆転してみせるという予告ともとれる。いわば演出としての「遊び」であり、聞き手の期待に応えたものとなろう。しかしあまりに露骨なフレーズであったため、歌を作る上で単調になり緊張感やハリに欠けると思ったのだらうか、晩年にいたるとこのフレーズは用いなくなつたようだ。（一二七）番歌は森本氏のご指摘通り二類本（六七）番歌としてみえ、従って定頼の若い頃の歌と考えてよい。

私は、定頼にとつての逆転発想技巧は、演出効果を狙つたサービスではなかつたか、と考えている。家集において見られるこの技法の詠歌状況は、藤原道長の桂の別荘での題詠歌であつたり、または屏風歌であつたり、あるいはつれなさを訴える相手への返歌であつたりする。こういった場合に逆転発想の歌を詠むと、秀歌をより名高くするための演出効果があると同時に、場が盛りあがつたり、または人間関係がスムーズにいったりするという効果も期待できる。『古今和歌集』の時代から逆接構造の歌は存在していたけれども、定頼はそれをサービスとして意図的に用いたのではないかと思えてならない。

本稿では、「水もなく」の和歌とその歌を披露したときのエピソードを伝える『西行上人談抄』に見える公任の反応を手掛かりとして、散る紅葉を雨に見立てることについての先行歌の採り込み方を公任と比較考察してみた。その結果、偉大な歌人であり、また教育

パバであった父公任の影響を色濃く受けながらも、自分なりの新しい、オリジナルな詠み方をしてみせた歌人定頼の姿が認められた。公任の和歌は言葉や発想には周知の先行歌を巧みにふまえてイメーヂを増幅させ、歌意は言葉の流れ通りに理路整然としている。これに対し定頼の和歌は、先行歌の享受については教え通りであるものの、和歌全体の構成についてはむしろ逆であり、意外な見立てとそれをうましく説明し尽くす逆転発想のとりあわせの妙が指摘できるのである。

更にそういった定頼の和歌を公任は秀歌と認めたわけであり、そこには息子の歌人としての成長を見守る大歌人公任と、父を凌駕することは困難だと知りながらも、新しい詠みぶりを自分の歌の技巧とした歌人定頼の姿を見ることが出来る。この点において、定頼は従来言われてきたような単なる「公任のミニチュア」ではない。

しかし、定頼のこのような歌がもてはやされた時代は、長くは続かなかつたようである。定頼は六条家歌人等の撰による『金葉和歌集』や『詞花和歌集』には入集されていない。その後、御子左家が台頭してきて再び詠歌が入集されたけれども、そのとき『千載和歌集』や『百人秀歌』、『百人一首』⁽²⁴⁾に採られた歌は

朝ほらけ宇治の川霧絶え絶えにあらはれわたる瀬々の網代木
といった、「幽玄」に一脉通じる歌であり、逆転発想技巧ではなかったのである。

〔注〕

(1) 『新編国歌大観』第一卷(昭和五八年角川書店)による。以下、八代集についてはすべて同書によった。なお仮名、漢字、

句読点については私意によって改めた所もある。

(2) 『新編国歌大観』第五卷(昭和六二年角川書店)による。

(3) 『群書類従』(和歌部所収)による。

(4) これについて、柏木由夫氏は「藤原定頼年譜考——その前半生について——」(鈴木一雄氏編『平安時代の和歌と物語』所収昭和五八年 桜楓社)において、「一条朝期の寛弘六年の折を第一候補とすべき」とされながらも、歌の内容について考える」と「寛仁」二年の折は歌題が『紅葉浮水(御)』とわかっていて定頼詠に強く響くものがあるようにも思える」と述べておられる。また、森本元子氏は近著『定頼集全釈』(私家集全釈叢書 六 平成元年三月 風間書房)において、寛仁二年九月の時のものと考証されておられる。

(5) 妹尾好信氏「藤原公任三船の管絃をめぐって——伝承の成立と流布の背景——」(『国語園文』昭和六〇年十月号所収)による。

(6) 長徳元年(九九五)誕生説によった。

(7) 『御堂閔白記』長和五年十月二日条による。

(8) 『権記』寛弘七年正月二日条による。

(9) 『公卿補任』による。

(10) 「盗古歌証歌」として凡河内躬恒の
立ちとまり見てをわたらむ紅葉ばは

あめとふるとも水はまさらじ

と並記する。

(11) 久曾昇昇氏著『古今和歌集成成立論(研究篇)』第三節(昭和三年一〇月 風間書房)

(12) 二類本『定頼集』(一七五) 番歌など。なお『定頼集』は以下すべて『私家集大成中古Ⅱ』による。

(13) 萩谷朴氏・谷山茂氏校注、日本古典文学大系『歌論集』所収(昭和十五年 岩波書店)

(14) 『公任集』は、『私家集大成中古Ⅱ』による。なお、萩谷朴氏は『平安朝歌合大成』において、この歌の詠歌年次を永延元年(九八七)から永祚元年(九八九)頃とされている。

(15) 『国司一覽』(『日本史総覧Ⅱ』)所収 昭和五九年 新人物往來社)による。

(16) 万寿元年正月六日、定頼は教通室となっていた妹を亡くしている。(『柴花物語』巻二一「後くゝの大將」) またその前年三月に姫宮と呼ばれた下の妹をなくしていた。(『小右記』治安三年五月十六日条に四十九日法事の記事がある)

(17) 『前五番歌合』『三十六人撰』『後十五番歌合』は、樋口芳麻呂氏校注『王朝秀歌撰』(昭和五八年 岩波書店)による。

(18) 森本元子氏『定頼集成立考』(『私歌集の研究』)所収 昭和四一年 明治書店)

(19) 同注(18)森本氏前掲論文。

(20) 口頭発表後、係助詞「こそ」の強調による逆接についての御質問を受けた。この件についてデータをとり「後拾遺和歌集」では二十一例あった。これは集全体の一・七%であり、この程度であれば、さほど全体を左右する数量ではないので口頭発表時のデータをそのまま用いた。

(21) 二類本『定頼集』(一二四) 番歌

大殿かつらにおはしたるに、題ふたついだして歌よみ

給しに、山ざとに田かるといふだい
山ざとにほどへぬる哉秋の田の

(22) 一類本『定頼集』(一六) 番歌
かりそめとこそおもひつれども

松の木の下に人々めてことひく所
ひくことはこと／＼なれど松風に

(23) 一類本『定頼集』(一五四) 番歌
かよふしらべはたがはざりけり

返し

おもふとしふしみのさとよききしかど
などまちかねと人のいふらむ

(24) 『百人秀歌』、『百人一首』は、樋口芳麻呂氏校注『王朝秀歌撰』(昭和五八年岩波書店)による。

〔付記〕本稿は平成元年度広島大学国語国文学会春季研究集会(平成元年六月二十五日)において、「藤原定頼の詠歌に見られる逆転発想技巧——見立ての意外性と逆転発想の妙——」の題で口頭発表した内容に加筆したものです。席上、貴重な御助言を賜りました諸先生方には記して御礼申し上げます。特に、句切れと連歌の関連性についてのご意見は、後日機会を改めて発表させていただきますと考えております。また、論を成すにあたり稲賀敬二先生には、終始暖かいご指導を賜りました。心より感謝申し上げます。

——本学大学院博士課程後期在学——